

仙台藩茶道石州流清水派宗家十世 大泉道鑑の歩んだ人生



石州流清水派宗家十一世

大泉 康（道鑑）

全日本石州流茶道協会の副理事長を拝命しておりました私の母、仙台藩茶道石州流清水派宗家十世大泉道鑑は、昨年十月三十一日満百一歳で天寿を全うしました。そこで今回、母の歩んで来た人生について紹介させていただきたいと思ひ筆を執った次第です。

母の人生を振り返ってみますと、私の父が四十歳で他界しましたが、その時私は二歳で私達四人の幼い子供を女手ひとつで育てた訳です。そのため、母の半生は全てを子育てと教育に傾注したと言えます。子育てが一段落した後の残された半生は、仙台藩茶道石州流清水派（当流）の宗家としての使命を果すべく、茶道の道一筋に歩んだと言えると思ひます。お弟子さんに毎日茶道を教えるかたわら、

仙台近辺だけではなく全国津々浦々に散らばっていた藩政時代の茶道の史料を当地へ赴いて広く集め、その解説と研究に没頭していた母の姿が今でも鮮明に脳裏に焼き付いております。しかし、平成十三年の晩秋に突然病に倒れ、当流の運営を非才の私と妻大泉道紀に託し、さらなる発展を念願する毎日でした。自らも亡くなる直前まで、お世話になつていた介護士様に、恩返しの意味を込めて茶道の手解きをする事をこの上もなく楽しみにしておりました。また、亡くなった日の前日には、凶^{はか}らずも最愛の孫で弟子の駒井和子様^とに茶道の指導を行う事が出来た母は、誠に幸であつたと信じて疑いません。この様な事からも、母は茶道を教える事に最後まで執念を燃やし続けていたと思われます。

しかし、母は病に倒れた後、自分に課せられた責任を果す事が出来ず、皆様にご迷惑をお掛けしている事を大変気に掛けておりました。この様な状況で、母が生前心温かいご厚情をいただいた皆様に少しでもお役に立ちたいと考へ、晩年に残されていた力を振り絞り、「石州流清水派十世大泉道鑑言の葉集^{ことば}」（平成二十一年一月一日発行）と銘を打った小冊子を編集し、上梓する運びとなつた次第です。この母の著書には、自分が歩んだ茶道人生の粗筋^{あらすじ}と当流に

対する考えや愛着が書き留められていると思います。そこで、この本の中で母が最も重視したと考えられる箇所を引用しながら、説明してみます。

十世 大泉道鑑の歩み

本名 大泉 淑子

本籍 宮城県仙台市若林区清水小路一番地の二

現住所 右同

生年月日 明治四二年（一九〇九）十月二二日

経歴・活動

明治四二年（一九〇九）一〇月 陸軍少佐落合辰吉と九

世落合道鑑（本名落合ツイ）の次女として誕

生

大正三年（一九一四）十一月 五歳から九世道鑑に師

事して石州流茶道を学ぶ。

大正一五年（一九二六）三月 宮城第一高等女学校

（現宮城県宮城第一高等学校）卒業

大正一五年（一九二六）四月 九世道鑑から皆伝を授

与される。

昭和四年（一九二九）一二月 陸軍少将大泉製之助の

長男大泉製明（東北帝国大学工学部電気工学科卒、元通信省技師）と結婚

昭和三六年（一九六一）四月 石州流清水派宗家を九

世道鑑から継承し、松翠庵十世大泉道鑑と称す。

昭和四五年（一九七〇）四月 宮城県史編纂室故岩

間初郎先生に師事し、「清水動閑注解石州流三百箇條」（三巻）及び「動閑茶湯書」（一八

冊）の解説・研究を開始し、また仙台藩茶道に関する資料の調査・研究を独自に始めた。

昭和五五年（一九八〇）一〇月 「清水動閑注解石州流

三百箇條付仙台藩茶道」（丸善出版センター）を出版

昭和五五年（一九八〇）一〇〜一二月 本著書の出版

に関する事が主要新聞各紙、読売新聞（昭和五五年一〇月三〇日）、朝日新聞（昭和

五五年一二月一五日）、毎日新聞（昭和五五年一二月八日）、サンケイ新聞（昭和五五年

一〇月二九日）及び河北新報（昭和五五年一〇月二八日、一二月二四日）により全国に

も紹介された。

昭和五五年（一九八〇）一月 本著書の出版記念会

（於仙台ホテル）が仙台市長故島野武氏ら関係者の臨席のもと開催された（昭和五五年一月四日付河北新報で紹介）。

昭和五七年（一九八二）五月 瑞鳳殿で行なわれた藩祖伊達政宗公の法要で、初めて献茶式を執り行った。

昭和五七年（一九八二）一〇月 塩竈神社主催「郷土に伝わる茶道具展」に協賛した功績に対し、同神社から感謝状が授与された。

昭和五七年（一九八二）一月 石州流茶道を通じた永年の文化活動の功績が評価され、仙台市・仙台市健康都市建設協議会から功労者として表彰された。

平成 三年（一九九二）六月 仙台藩茶道石州流清水派道門会の顧問に就任

平成 三年（一九九二）一〇～十一月 「伊達政宗と仙台藩の茶の湯展」（仙台ビブレ主催、河北新報社等一五団体の後援）を後援し、仙台藩茶

道の茶道頭・宗家累代伝来の台子及び茶道具を展示した。

平成 四年（一九九二）九月 藩主の観月の亭として「月見御殿」と言われた観瀾亭（松島町）で、伊達家十八代当主伊達泰宗氏を正客にお招きし、「月見の茶会」を行なった。

平成 六年（一九九四）一月 全日本石州流茶道協会の理事に就任

平成 八年（一九九六）五月 第八回石州流茶道全国大会（仙台大会）を会長として主催

平成一四年（二〇〇二）三月 「仙台藩石州流教本」（きた出版）を出版

平成一四年（二〇〇二）四月 本著書の出版が平成一四年四月二三日付河北新報で紹介された。

平成一四年（二〇〇二）九月 「仙台藩茶道石州流教本特殊手前編」（きた出版）を出版

平成二〇年（二〇〇八）五月 第二〇回全日本石州流茶道協会仙台大会副会長に就任

全日本石州流茶道協会の発展に永年尽力した功績に対し、同協会から感謝状が授与された。

平成二〇年（二〇〇八）一二月 「仙台藩茶道石州流教
本補遺」（東北プリント）を出版

平成二二年（二〇〇九）一月 「石州流清水派宗家十

世大泉道鑑言の葉集」（東北大学生生活協同組

合プリントコープ）を出版

平成二二年（二〇一〇）七月 全日本石州流茶道協会

副理事長に就任

平成二二年（二〇一〇）十月 「仙台藩茶道石州流教

本特殊手前編（二）」（東北プリント）を出版

私の祖母九世落合道鑑から十世を継承した母は、当流を正しく次の世代に伝えなければならぬという使命感から、仙台藩茶道の茶道頭・宗家を継いだ印として代々伝えられて来た二世清水動閑註解「石州流三百箇條」三巻及び「動閑茶湯書」十八冊の解説・研究が日課になりました。この研究成果に加え、仙台藩の茶道に関する資料の調査・研究に基づいた仙台藩茶道の歴史の概要を付記した「清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道」（昭和五十五年十月十一日発行、丸善出版センター）の編集に、十年余の歳月を掛けてようやく出版に漕ぎ着けました。その著書の

「はしがき」を次に転載します。

はしがき

仙台藩における茶道は、一世清水道閑の織部流から二世動閑の石州流に変わり、更に三世道竿が創意工夫した石州流清水派がその中心となり、以来この流儀が代々継承されて藩の庇護のもとに発展して参りました。しかし明治維新後、廃藩置県による藩の解体に伴いその援助がなくなつて、茶道の活動の維持は極めて困難な状況に陥りました。このような状況にありながら八世清水道鑑は一筋に茶道を研究し、後進の指導に当たつてこられました。そして晩年に私の実母である九世道鑑（本名落合ツイ）を後継者に選び、『石州流三百箇條』三巻と『動閑茶湯書』十八冊、及び「片桐石見守貞昌宗閑居士像」と「洪紙庵之記」の二幅の掛軸を授けてその代を継がせました。この『石州流三百箇條』三巻は二世動閑が石州公の著した『石州流三百箇條』の註解として書き残したものです。その内容は茶湯に対する心構え、貴人に対する心遣いや、拝領の茶道具の扱い方をはじめとして、道具

の置合せ、取合せ、床の間、茶室、茶庭の作事に至るまで具体的な説明と注意が施されております。『動閑茶湯書』は清水動閑が若い時、約十三年間石州公の傍にあつて見聞した事柄を書き集めたものと思われまます。これらは清水家において、石州流の奥儀として代々の宗匠に受け継がれてきました。その後、母から私に代が譲られませんでしたので、私はこれらの伝書を理解し門人に教えなければならなくなつたわけですが、やがて門人達だけではなく広く茶を楽しむ方々にも目を通していただき、石州流の茶道を知っていただきたいと考える様になりました。そこで、このたび『石州流三百箇條』三巻、『動閑茶湯書』十八冊のうち「客呼様之書」、「客呼様客振之書」、「客挨拶之書」、「風炉茶之湯之書」、「床之内之書」、「三斎公御咄之書」、「道具押形」の七冊を解説し、それぞれ註を付して出版することになりました。また石州流および仙台藩の茶道の概要を付記しました。残り十一冊の茶書については次の機会に紹介したいと考えております。

本書の発行にあたり、長年にわたり懇切な御指導を賜わり、かつ難解な叙述の解明に対し御尽力いただいた宮城県史編纂室岩間初郎先生に心から感謝申し上げます。

また序文の執筆を快く御引き受け下さいました仙台市長島野武氏、元仙台市議会議長佐藤欽一氏、題字を御願いました元東北大学教授有井凌雲先生、数々の史料の解釈を御願いました東北大学名誉教授佐川修先生、終始有益な御助言を頂いた徳島文理大学助教授庄子昇氏、宮城県気仙沼高等学校教諭佐々木常人氏、数多くの貴重な史料を見せて下さいました八世清水道鑑令孫清水久氏、佐藤欽一氏、栗村三樹氏、栗村安氏、昌繁寺住職佐藤光純氏、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫助手大沼晴暉氏、国学院大学大学院生鈴木正人氏、日本馬術連盟技術顧問城戸俊三氏、元宮城県議会議長故門伝勝太郎氏、そして史料の調査に御協力下さいました仙台市博物館、宮城県図書館、国立国会図書館、東京国立博物館、東北大学付属図書館、斎藤報恩会自然史博物館、東北歴史資料館の皆様にも厚く御礼を申し上げます。

最後に、本稿に係のある重要な史料および理解の十分な点など御教示賜れば幸に存じます。

昭和五十五年九月

著者



著書「清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道」を出版した時の十世大泉道鑑
(昭和55年12月24日付河北新報に掲載された写真)



藩祖伊達政宗公の法要で、献茶式を執り行なう十世大泉道鑑
(昭和57年5月、瑞鳳殿於)

次に、母が生涯こよなく愛し続けて来た当流の優美なお手前は、江戸時代から些かも変わる事なく、母の代まで連綿として引き継がれて来ました。そのため母は、この貴重なお手前を後世に永きに亘り残していきたいという一心で、それを「仙台藩茶道石州流教本」（平成十四年三月十七日発行、きた出版）にまとめました。本書の「はじめに」及び「あとがき」を以下に転載します。

はじめに

茶の湯とは美味しく茶を点てて客を持って成し、持て成される道の事である。その道とは亭主が心を尽くして客を持って成し、楽しい一時を過すために、形に表したのが色々な手前であり作法である。近年、茶の湯といえは手前が全てのように思われがちであるが、手前はその一部に過ぎない。しかし、手前がなければ茶の湯は成り立たないので、昔から手前の稽古は厳しく行われ、客となった時の心構えや作法も決してゆるがずにはされなかつた。

茶の湯はあくまでも体験する事が肝要であり、本を読むだけで修得できる性質のものではない。手や指先のし

ぐさや間ま合などは、その場その場で口授する以外に教える方法はない。茶の湯の手前を習得する過程で特に注意すべき点は、基本の手前をしつかりと身に付ける事である。稽古に馴れてくるとすらすら出来るという気の緩みから、ややもすれば手先の動きがくずれ易くなったり、また道具を置く時に置いて直ぐ手を離しがちになるので注意が肝要である。この様な事を、よくよく自戒して一層稽古に励めば、自然に心と技が磨かれ、やがて茶の湯の良さ、楽しさを理解する事が出来るようになり、利休が大切にした「茶の湯の心」を悟る事も可能になる。

もともと、茶の湯は一朝一夕に容易に完成したものはなく、多くの宗匠達の努力の積み重ねにより、長い年月を経て完成したものである。まず、室町幕府八代将軍足利義政の同朋、能阿弥のうあみの創意工夫によって書院風の茶の湯、東山流が誕生した。その頃村田珠光は一休禅師に参禅して茶禅一味の境地を開拓し、「清浄礼和」を茶の湯の本旨とした。その上、更に珠光は庶民向きの数寄屋の茶法、珠光流を開いた。また、武野紹鷗は見える事のなかつた珠光の遺志を受け継ぎ、侘びの境地を以て茶道の理念とし、侘びの小座敷を考案した。千利休は東山流

を北向道陳きたむきどうちんに学び、更に紹鷗せうおうに師事して珠光流の教えを受けた。千利休はこの二つの流儀の主眼とする茶の湯の心と技を会得し、これを更に宗教的及び芸術的に高め、「和敬静寂」の本義をもつて茶道を大成したのである。利休の茶の湯で最も注目すべき点は、珠光の茶の湯の本旨とした「清浄礼和」に深遠な意味を持つ「寂」を加えた事である。その後、千道安、桑山宗仙、片桐石州の宗匠達のたゆまぬ工夫、努力の積み重ねにより、現在の石州流茶道が完成したのである。

二世清水動閑は、主君二代藩主伊達忠宗の命により、石州公に師事して印可を受けた。その後動閑は、仙台藩の茶道頭に任ぜられ、『石州流三百箇條』三巻の註解及び『動閑茶湯書』十八冊を著した。これらの本は石州流茶道全般が集約されているため、三百四十余年に渡り継承されてきた仙台藩の茶道石州流は、この『三百箇條』を基盤にして、代々の宗匠の手を経て私共に今日まで継承されてきた。仙台藩の最後の茶道頭八世清水道鑑は、明治維新の未曾有みぞうの大激動、大混乱に遭遇したが、その苦難を良く克服して茶人の道を全うまっとうした。このようにして伝統のある仙台藩の茶道石州流清水派の茶の湯の

技と、それにもまして重要な茶の心を後世に伝えた八世道鑑の功績は、誠に偉大であると言えよう。その後、九世落合道鑑を経て著者の代まで、些ちかも変わる事なく昔のままの茶の湯が連綿として継承されている事は誠に意義深い事で、この点が当流の大きな特徴のひとつと言える。著者は、九世道鑑の跡を受け継ぎ十世となったので、先人の創意工夫によって完成した石州流清水派の茶道を次の世代に正しく伝える責任を痛感している次第である。そこで、まず仙台藩茶道の資料に関する調査、研究を行い、その成果の一部を『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』（昭和五十五年、丸善出版センター）として出版し、その中で仙台藩茶道史の詳細を明らかにした。しかし、仙台藩茶道石州流の茶の湯の手前を詳しく、分かり易く解説した著書は見当たらない。そこで、当流の手前の稽古けいこに役立つ平易な解説書を出版しようと考えた。しかし、これはあくまでも稽古の手引書であつて、安易にこれに頼つてしまい、実際の茶の湯の稽古を怠つてはならない。前に述べたように茶の湯の手前の上達には、繰り返し繰り返し稽古を続ける以外に方法はない。このことを理解した上で、本書を稽古の一助にして

いただければ、これ以上の喜びはない。

平成十三年十月

著 者

あとがき

第二次世界大戦後、我国は、全世界を瞠目させる経済発展を遂げ、豊かな物質文明を享受することが出来るようになった。しかし、その発展とは裏腹に精神文化の著しい退潮に起因した大きな社会問題が数多く発生してきている。従って、茶の湯などのような我国独自に発展してきた精神文化を継承・発展する事の重要性が今日再認識されるに至った。我国の文化の歴史の中で、茶の湯は、現在に至るまで最も重要な位置を占め、各方面に多大な影響を与えてきた。そのため、その精神文化を真に理解するためには、茶の湯の神髄を理解する事であると言つても過言ではない。

当流は、仙台藩の正式な茶の湯として現在まで連綿として継承されてきたが、その手前は歴代の仙台藩茶道頭・家元の創意工夫によつて長年磨き抜かれたため、こ

の上もなく上品で美しいものである。私は母九世落合道鑑から代を継いでからは、この茶の湯を誤りなく正しく後世に伝える責任の大きさを痛感する毎日であった。この私に課せられた責任を果たす一つの方法として、この教本を書く事を思い立った次第である。

毎日の茶の湯の稽古が済み、夜静かに手前を思い浮かべながら書きためていつているうちに、この教本が完成したが、気が付いてみたらどうでしょう、もう九十歳を既に過ぎてしまっていた。この様にして、一通りの茶の湯の手前を書き上げたが、この教本を読んで理解したからと言つて、茶の湯の全てが分かったとは決して言えない。このような本は、全て茶の湯の手前の指針であつて、真の手引きにはなり得ない事は言うまでもない。その理由は、最も大切な茶の湯の精神が、必ずその背後に存在するからである。日頃の茶の湯の稽古・修練を積む事によつてのみ、その真の心を悟ることが出来、一心に点てたお茶を仏に供し人に施し、我も飲むという心境になれるのである。

私は年を取り、手足の力は年々弱くなったが、心から幸せを感じる毎日である。この幸せの原動力は、『清水

動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』を出版後、長年
気掛かりだったこの教本が上梓される運びとなった事も
そのひとつであるが、それにも増して弟子達が一心に茶
の湯の稽古に励み、その上達していく姿を見守る事が出
来る事である。私の子供や孫と同様に可愛い弟子達が心
置きなく、私と一緒に稽古を楽しんでいるのを見る事が、
私の真の生き甲斐であった。心のこもった美味しいお茶
を飲み、弟子達と共に憂いのないすばらしい茶の湯の世
界に浸って年を重ねていく事は、この上もなく幸せで楽
しいものである。

皆様の日頃の稽古の上達にだけでなく、その技をさら
に高め、茶の湯の心を我がものとし、幸せで楽しい人生
を歩む上に、本書が少しでも役に立てば、望外の喜びで
ある。

教本を書き終えて

十世 大泉道鑑

ところで、母の葬儀は平成二十二年十一月六日に執り行
われましたが、多くの方々のご会葬下さいました。また、
皆様からの過分なるお志、生花及び弔電に加え、仙台伊達
家十八代当主伊達泰宗様、全日本石州流茶道協会理事長湊
素仙様及び仙台藩茶道石州流清水派道門会弟子代表細谷道
紀様の三名の方からは、実に心のこもった丁寧なる弔辞を
賜りました。ここに、この紙面をお借りして皆様に心か
ら感謝の意を表します。この三名の方から頂戴した立派な
弔辞を本日改めて拝読しますと、生前母は多くの方から支
えられてきたため、生き抜く事が出来たのだと実感しまし
た。また、いずれの弔辞にも母の姿が目に見え、来る様
な事柄が記されているため、母の人柄を偲んでいたくよ
すがにと思ひ、三名の方のご了解を得てここにこれらを掲
載させていただきました。

弔 辞

仙台藩茶道石州流清水派宗家十世大泉道鑑様のご霊前に
謹んで哀悼の言葉を申し上げます。

仙台藩と茶道石州流との歴史的関わりは、鄙の華人とも
称され、また、茶道にも造詣が深かった藩祖伊達政宗公が、

仙台に茶道を広めるべく古田織部に師事していた一世清水道閑を登用した事に始まります。

二代藩主伊達忠宗公の時代には、石州公が四代將軍徳川家綱公の茶道師範となった事から、石州流は大名茶として、天下を風靡し、二世清水動閑は仙台藩の茶道頭に任ぜられました。四代藩主綱村公の時代には、石州流清水派は仙台藩の茶道として確立し、以来その奥義は茶道頭から今日の宗家へと代々受け継がれて参りました。

大泉淑子様は、明治四十二年十月二十二日九世落合道鑑様の次女としてご誕生し、幼少より石州流茶道を学ばれ大正十五年皆伝を授与されました。

昭和四年、陸軍少将大泉製之助様のご長男大泉製明様とご結婚されましたが、ご主人様は四十歳で亡くなられ戦後の混乱期を淑子様は、おひとりでお子様の教育に専念され、再び茶道に打ち込むことが出来たのは、ご息康様が東北大学に進まれてからの事と伺いました。

昭和三十六年、九世道鑑宗匠より石州流清水派宗家を継承され、松翠庵十世大泉道鑑を襲名されました。以降、茶道の指導と流派の伝書である三巻からなる『清水動閑註解石州流三百箇條』そして十八冊からなる『動閑茶之湯書』

の解説と解釈にあたられ、この間十年を費やし昭和五十五年『清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道』を出版されました。本書は仙台藩における茶道の歴史研究書として高い評価を受け後世に残る著書としても知られております。

昭和五十七年には、仙台藩祖伊達政宗公の御霊屋瑞鳳殿にて営まれました政宗公御命日遠忌法要にて献茶の御奉仕をいただきました。その折、先生から献茶式にあたり、お道具を新調したいのご相談を受け、完成致しました大棗には「六十二万石」と銘を付けさせていただきました。十世道鑑の時代に、立派なお道具を加えることが出来ました。と、先生は大変喜んでおられました。

また、平成四年九月には、太閤豊臣秀吉公より伊達政宗公が拝領し、二代藩主忠宗公の時代に藩主と姫君の観月の亭として松島に移築されました観瀾亭にて月見の茶会を催され、正客としてお招きをいただきました。その際、月をあしらった洋風菓子が主菓子として出て参りました時には、ご一緒したお客様から「流石は伊達よ」との声があがり、先生の御趣向に座が一層和やかとなった事を思い出します。

まだまだ、先生との思い出は尽きませぬが、私自身、十

世道鑑門弟の一人として先生から茶道のご指南をいただき
ました事を忘れることなく、伊達家と縁深き仙台藩茶道石
州流清水派との歴史と絆をこれからも大事に守ってゆく所
存でございます。

仙台藩茶道石州流清水派宗家十世大泉道鑑先生、どうか、
安らかに眠り下さい。

平成二十二年十一月六日

仙台伊達家十八代当主

伊達泰宗



伊達泰宗様により「六十二万石」と銘が
付けられた大棗（十一世大泉道鑑所蔵）

この大棗は、伊達泰宗様の取り計らいに
より、中島淑枝様が母のために特別に製
作したものです。この大棗の表は総高蒔
絵で伊達家の家紋「竹に雀」が描かれ、
蓋の内側には伊達様の花押が印されてい
ます。

弔 辞

仙台藩茶道石州流清水派宗家十世大泉道鑑先生の靈に先
輩諸氏が多くご参列の中僭越ではございますが、全日本石
州流茶道協会を代表して謹んで哀悼の言葉を捧げます。

大泉道鑑先生は、石州流清水派宗家九世落合道鑑を母と
して明治四十二年十月二十二日に、この世に生を享けられ
百一歳の天寿を全うされました。

茶道石州流の指導者として、長年に亘って若い方々を指
導してこられた小柄ながら凛としたお姿が、思い出されて
なりません。

ご案内の通り全日本石州流茶道協会は、平成元年に姫路
の茶道研究家故野村瑞典先生のご助言で結成され、本年で
二十二年を迎えました。会員も全国の石州流十五会派が加
盟し、石州流の正しい伝承に努力致しております。先生は
平成六年に理事に就任され、また本年は副理事長をお願い
致しておりました。

毎年、持ち回りで全国から協会加盟の会員が約三百名集
まり、第一日目の研究会はテーマを決めて、各地の代表が
模範点前を披露しております。先生は平成八年五月に開催
されました第八回仙台大会の大会会長、平成二十年創立記

念の第二十回では大会副会長の大役を果されました。当日は青葉祭りのお忙しい中、伊達家十八代当主伊達泰宗様に記念講演をいただき、大会を盛会裡に終了する事が出来ました。有難うございました。

先生は、五歳からご母堂九世落合道鑑先生に入門なされ、大正十五年十七歳で皆伝を授与され、昭和三十六年石州流清水派宗家を継承し、十世大泉道鑑と称されました。

昭和四年大泉製明様とご結婚、四名のお子様をもうけられました。しかし、昭和十九年ご主人様が赴任先の韓国において、四十歳で病にて亡なわれるというご不幸にみまわれました。戦中戦後と厳しい状況の下でお子様の養育等大変なご苦労があった事と推察申し上げます。この様な状況の中でも、仙台藩茶道石州流清水派の宗家としてご活躍なされました。

石州流の流祖片桐石見守貞昌（石州公）は、四代將軍徳川家綱の茶道師範を命ぜられ、將軍家の茶道の規格を定めました。これを世に「石州流三百箇條」と称し、その後石州流はこの三百箇條を基にして、大名茶として天下を風靡しました。当仙台藩においても、茶道頭二世清水動閑が君命により石州公に師事して奥義を極めて、「清水動閑註解

石州流三百箇條」を著しました。また全国に石州流清水派を広めた礎を作りました。わが水戸藩も仙台藩の石州流清水派の流れを伝承しております。

先生は昭和四十五年（一九七〇）からライフワークとして、「清水動閑註解石州流三百箇條」の解説・解釈および仙台藩茶道の歴史の資料の研究に没頭致しました。ご自分で資料を探し、全国どこへでも出掛けてカメラに収め調査研究をなされ、その成果を「清水動閑註解石州流三百箇條付仙台藩茶道」にまとめ出版されました。この著書は、茶道研究の名著として茶道の歴史に永遠に残るものと、高く評価されております。

先生は、十年前の平成十三年九十二歳の時脳梗塞で倒れ入院されました。その後リハビリに努力され高齢にかかわらず、一人で歩けるようになったそうです。その陰にはご家族の皆様の看護の努力があった事と存じます。特にご子息の康様が、忙しいのにかかわらず毎日病院に行き励まし、一緒に歩行訓練を続けられたと聞いております。

亡くなる一週間前に、「仙台藩茶道石州流教本特殊点前編」第二巻を完成させました。

心から石州流茶道を愛され、研究に余念がなかった人生

を見事に全うされました。しかしながら、ご家族の皆様はじめ、ご一門の皆様にとつては真に残念無念な事であると存じます。心からお悔やみ申し上げます。

私共は、先生の残された茶道に対する情熱と数々の教えを、次の時代に伝えてゆかなければなりません。さらに、茶道界の発展を目指しご一門の方々と共に努力いたす事が先生に対するご恩返しかと思えます。

いつまでも見守って下さい。

先生のご遺徳を偲びつつ心からご冥福をお祈り申しあげ弔辞といたします。

安らかにお休み下さい。

弔 辞

仙台藩茶道石州流清水派十世大泉道鑑先生の弟子を代表して、謹んでお別れの言葉を述べさせていただきます。弟子一同が最も敬愛してやまぬ道鑑先生のご逝去に接し一同深い悲しみに打ちひしがれております。

道鑑先生のご遺影を前にして今にも「どうぞお入りください。」という声が聞こえてきそうです。このようにして、いつもにこやかに微笑んで心温かく私達を迎えて下さいました。帰りの際にはいつも玄関先で「それでは又来週。」とおっしゃってお送り下さいましたね。それが昨日の事のように思い出されます。

合掌

私が石州流の門を叩ききつかけとなったのは、華道を習っているうちに、仙台藩の茶道「石州流」が道鑑先生の所に脈々と受け継がれている事を知ったからです。初めて道鑑先生にお目にかかった時の事です。広いお部屋に何やら会席の「配膳」で始まる手順書のようなものが一面に貼ってあったのです。それが、私にとってのお茶と道鑑先生との出会いになりました。

日々の稽古の合間に先生とする会話はそれは楽しくて、楽しくて。時には道鑑先生の活発な少女時代のお話であつ

平成二十二年十一月六日

全日本石州流茶道協会理事長

水戸何陋会会長

湊 素仙

たり、時には終戦前の韓国での暮らしの事であったり、康先生が留学されていた時に、アメリカを旅した時のお話であったり、テレビ番組の「笑点」のお話であったり、様々でした。私が今日まで稽古を続けてくる事が出来たのは、心をリフレッシュする時間がそこにあつたからだった様に思います。

道鑑先生は茶道に関する多くの文章を書いておられますが、その中で、私には好きな一文があります。道鑑先生が会長を務められ、仙台で初めて開催された石州流茶道全国大会の歓迎茶会での事を、道鑑先生はこんな風に記されています。

第一に考えたことは、真心のこもった美味しいお茶をお客様方に差し上げる事でした。そのため、どのお茶が一番よいか、あちらこちらの色々なお茶を点でて飲んでみました。次に、お茶の最適な分量を工夫して決め、お湯の量は昔からの言い伝えの通りに致しました。私共の流では、濃茶は茶筌をよく振り大きな泡を消し黄味がかつた緑の細かな泡でほんの少し盛りあがつたようになります。よく点てたお茶は、飲むと味

わいが深く、まろやかで、薄茶とは異なる舌ざわりがあり、飲み終えるとお茶の真の味、香が爽やかな余韻となつて口中にしばし残るのが何とも言えない味わいと言えましょう。

また道鑑先生のおっしゃった事で、私が好きなお言葉がございます。お客様に、「お茶が美味しい。」と言つて頂く事が一番の喜びだと常々おっしゃっておられました。このお言葉はお客様に対する温かい思いやりの心であり、これを最も大切にしなければならぬという教えであると思います。この道鑑先生のお心とお教えを次の世代に伝える責任があると思います。

道鑑先生は、当流の宗家としての重責をお見事に果されて、天寿を全うされました。弟子一同は、結束して先生が命懸けで守られた、仙台藩茶道石州流清水派の茶道を継承し、さらに発展させる事に、努力する事をここにお誓い申し上げます。

道鑑先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

平成二十二年十一月六日

仙台藩茶道石州流清水派同門会

弟子代表 細谷道清

最後になりましたが、生前母に心温かいご指導とご好誼を賜りました皆様に、母に代って私から厚くお礼申し上げます。今後は、私大泉康が十一世大泉道鑑として当流を継承し、妻大泉道紀と力を合わせ、微力ながら身を粉に砕いてその運営に当る事をお誓い致します。皆様には、母と同様に私共にも、心温かいご指導とご支援を賜りますようお願い申し上げます。筆を置きます。

編集後記

全日本石州流茶道協会事務局長

大泉 康（道鑑）

杜の都仙台は、新緑が目にしみる美しい季節を迎えておりますが、皆様には、益々ご清栄の事と推察申し上げます。

皆様ご承知の通り、今年三月十一日には、日本国民が未だかつて経験した事のなかった大規模な東日本大震災に見舞われ、その犠牲者はおびただしい数に上りました。特に、その沿岸部には、途方もない大津波が押し寄せたため、その被害は甚大なものとなりました。多くの犠牲者には、心からご冥福を祈るばかりです。この様な大震災のため、今年の全国大会（秋田大会）が延期されることになりました。事は、やむを得ない事情とは言え、誠に残念であります。特に、鋭意ご準備に励んでこられた秋田の皆様には、大変申し訳ない気持ちでいっぱいでございます。

この大地震の発生後間もなく、日本各地の皆様から私共へ心温かいお見舞いのお手紙、Eメール、お電話を頂戴しました。この紙面をお借りして、被災地の会員の方々を代表させていただきます、心からお礼を申し上げます。

また、この様な混乱の中で、しかも「関」の原稿の締切を多少早めさせていただいたにもかかわらず、快くご協力して下さいましたご執筆者の皆様には、重ねて厚くお礼申し上げます。

この上は、我国に課されたこの古今未曾有な困難を乗り越えながら、本協会がさらに発展すると共に、「関」がより有意義な本協会の機関誌となります様に、鋭意努力して参りたいと思いますので、従前にも増してご指導、ご鞭撻を賜わります様切にお願い申し上げます。

関 第二十一号

平成二十三年五月十九日 発行

発行 全日本石州流茶道協会

事務局 981-0943 仙台市青葉区国見六―二五―二〇

仙台藩茶道石州流清水派道門会

Tel & Fax 〇二二―二七六―〇三四四

事務局長 大泉 康（道鑑）

編集 株式会社 東北プリント

印刷 980-0822 仙台市青葉区立町二四―二四

Tel 〇二二―二六三―一六六

本協会アドレスは <http://www.sekishunet.com/>です。